巻中

17　青緑耶馬渓真景図　斎藤畸庵

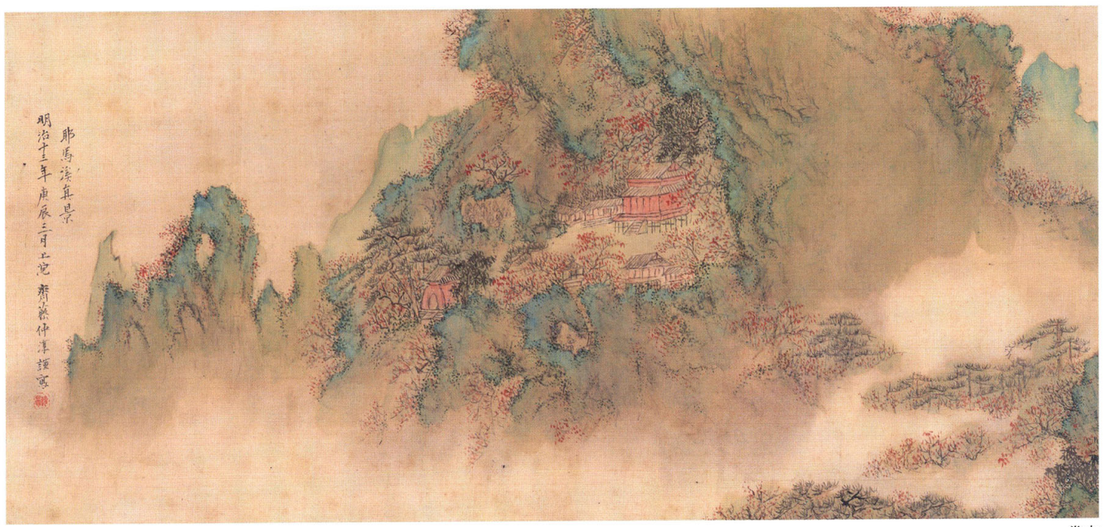
明治十三年（一八八〇）
絹本着色
二七・五×二七六・四

耶馬渓とは、大分県北部の山国川の上流から中流にかけての渓谷をいう。文政元年（一八一八）に諸国遊歴の過程でこの地を訪れた文人頼山陽が、日本では珍しい奇岩のそそり立つ、まるで中国の山水図を思わせるその景勝に感動し、中国風の「耶馬渓」と名づけて、詩文と図による「耶馬渓図巻」を著したことから、以降文人の世界を中心にその名が広く知れ渡り、富岡鉄斎をはじめ文人画家が好んで描く画題ともなった。

この耶馬渓を描いた本絵巻は、山容の先端には白緑系の顔料を賦彩して、美しい青緑山水のイメージも重ねながら明清画を思わせる格調高い山水図巻に仕上げている。青緑山水の風景の中に、紅葉した木々の赤が点々と混じる様もまた美しい。この美しくも荒々しい岩山が連なる中、随所に中国の高士風の人物やその従者らしき童子、帰牧図のイメージを投影したような牛を引き連れた人物などが小さく描き込まれ、中国の深遠な山水を思わせる景観図となっている。五百羅漢の石仏で知られる羅漢寺にいたって絵巻は幕を閉じる。

作者の斎藤畸庵（一八〇五～八三）は但馬国（兵庫県）城崎町に生まれ、名は淳、字は處厚または仲醇。京都で中林竹洞に南画を学んだ後、紀州や大和、そして九州地方を遊歴した。晩年に東京に出てからは、宮内大輔の杉孫七郎の知遇を得てしばしば宮内省の御用を受けて作品を制作したという。本図も明治十三年（一八八〇）に杉を伝献者として献上された。山水画をよくしたが、詩もたくみで『淇影湘香室吟稿』『薄遊漫載』などの著書をのこした。

一巻



巻末

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan